

CREAM Crossroads

PERSONNEL : Eric Clapton(vo, g)
Words & Music by Robert Johnson

採譜・解説=安東滋

外タレ公演の定番メニュー(?)ともなったエリック・クラプトン日本公演の御祝儀スコアとして、今回はクリーム期の代表曲「クロスロード」を取り上げてみた。クラプトン一世代の名演として誉れ高い、まさにロック・ギターのバイブルとも言える演奏なので、これを機に若いGM読者もぜひクラプトンの真髄に触れてみてほしい(特徴的なフレージングや愛用ネタなどをまとめた、11月号の特集記事を併読していただくと、当時のクラプトン節の特徴がよくわかると思う)。アンプ直結(たぶん)の太くてウォームな極上トーンを武器に、ドラム&ベースとくり広げる白熱のインター・プレイノ……何と言ってもこれが最大の聴き

どころだろう。

なお、誌面スペースの都合上、歌部のバックギタ・パートにはリピート・マークを付けさせてもらった。

▶ **Guitar**

①: 本曲の看板リフ。改めてコピーしてみると、音の長短やダイナミクスの“押し引き”など、ニュアンスとノリを再現するのが意外に難しい。音形的には2小節目最後の、5弦C音とともに聴こえる高いC音が不可解? 譜面上は同音を3弦上に置いたオクターブ型(そう言えばジェフ・ベックも昔こんなことをやっていたっけ…)としたが、2弦1f使用の可能性も捨て切れない。

②: D7部はコード・フォーム崩しの

アルペジオ。5弦3fは同音部のみ薬指を1弦側から移動させていると思う。

③: 歌部のバックギタは(クラプトン自身が歌っていることもあり)シンプルなボトム・リフが配置されている。それに続く①と同音形リフのシンコペーション部は、Aフォームの3&4弦部だけクツて次小節の頭で5弦開放を弾き直すとニュアンスが近くなる。

④: 計2コーラスの1stソロ。メジャー&マイナー両ペンタトニックのコンビネーション、スライドを活用したブロック連結、ハンマリング絡みの複音リック、愛用奏法のひとつであるダブル(ユニゾン)チョーキングなど、当時のクラプトン節のエッセンスが凝縮されている。ポ

ジショニング面では、1コーラス目の6弦トニック型ポジションから、2コーラス目で5弦トニック型へと移行するポジション展開に注目。

⑤: 2弦9fに向けてのグリス・アップを經由している模様。

⑥: 2ndソロは17fを軸とするハイポジで計3コーラス弾き倒す! このポジションだと中指を多用するフィンガリングがベターだろう。

⑦: 冒頭のチョーキングはニュアンスを考慮して2弦としたが3弦21fでも可。

⑧: 怒涛の複音フレーズ攻撃。③の2小節目は便宜的に単音の型で記譜したが、その手前の2&3弦の複音フォームをキープしたままで弾くべし。

♩=ca129
0'00"

Intro A7

① 0'00"

D7 arpeggio A7

② 0'08"

E7 D7 A7

arpeggio p q.c. q.u. h p h h

I went down

0'22"
0'44"
1'06"

A A7 D7 A7

to the cross - road fell down on my knees down
went down to the cross - road trid to flag a ride down
going down to Rose - dale take my writer by my side going

③ 0'22"

E7 D7(on F#) A7

Go - ing down to Rose - dale take my writ - er by my side going
 can run you can run tell my grampa we've run run

A7 D7 A7

down to Rose - dale take my writ - er by my side you
 you can run tell my grampa we've run and'm

E7 2x to D7 A7

still find ahouse ba - by on the riv - er side
 standing at the cross - road I

A7

gva
 cho W.C.
 cho W.C.

D7 A7

cho
 cho d
 cho
 cho

E7 D7 A7

Q.C. W.C. cho p h p Q.C. cho d
 Q.C. Loco W.C. cho p h p Q.C. cho d

